

タイ・チャオプラヤ川下流域における外来シクリッド科魚類の 生態学的影響と利用

-副題-

平成 26 年度入学

派遣先国：タイ

友尻 大幹

キーワード：生物多様性，外来魚，シクリッド科魚類，生態的地位，ホットスポット

対象とする問題の概要

近年、世界的各地で在来生態系にとって強大な脅威となっている環境問題として、外来魚問題がある。東南アジアも例外ではなく、多くの外来魚が導入され、自然水域に定着している。東南アジアは、世界有数の生物種が極めて多いホットスポットであり、その貴重な生物多様性にとって脅威となる外来魚問題への対応は急務と言える。しかし、現在、東南アジアの外来魚研究は、ほとんど行われていない。そこで、本研究では、外来魚の生態学的影響、並びに人間による利用について明らかにする。研究対象は、食用として広く利用されているティラピアを含むシクリッド科魚類 3 種に定め、調査地は、タイ・バンコクを流れるチャオプラヤ川下流域とする。バンコクでは、近年急速に開発が進んでいるが、未だ多くの自然も残されている。つまり、人の生活と野生動物の生活が密接しており、外来魚問題という人為的に引き起こされる現象を研究するには最適な環境である。

研究目的

本研究の目的は、外来シクリッド科魚類 3 種が在来生態系においてどのような生態的地位を持ち、どのような影響を与えているのかを解明すること、並びに、地元住民にはどのように利用され、人々の生活の中でどのような位置づけになっているのかを解明することである。前者に関しては、特に、在来生物との生態的地位の重複による競合に焦点を当てる。食性や行動、産卵生態などを調べることで、在来生物への負荷を明らかにする。後者は、東南アジアにおいて外来魚研究を行う際に非常に重要になるものである。なぜなら、東南アジアは元来、淡水魚を食す文化が非常に発展しており、外来魚が人々の生活に浸透しやすいからである。本研究では、社会学的な調査を行い、外来魚の利用や食文化の中でどのような位置づけになっているのかを明らかにする。

これらを解明することは、今後、外来魚への対処や管理、また保全研究が行われる際に重要な知見となるものである。

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークにおいて、衝撃を受けた事がある。それは、東南アジアの人たちの外来魚に対する考え方についてである。そもそも、外来魚という考え方がほとんど普及していないように思われたのである。おそらく、日本のブラックバスのように悪いイメージを持っている人間は、大学で専門的に研究をしているような一部の人間に絞られるようであった。特に一般の人たちは「魚」としか見ていないようであった。それを顕著に表す例として、信仰心からの生き物の放流がある。今回の調査で、とある寺院を訪れる機会があったのだが、そこでは生き物を放すと徳があるという風習で、敷地内にある池に生き物を放流する人が多くいた。そのために放流用に、生き物を販売する露天が並んでいたのだが、そこで売られている生き物のほとんどが外来生物だったのである。(写真)



写真1 露店で販売されていた外来生物（セルフインプレコ、雑種キャットフィッシュ、ミドリガメ、グラミー等)

外来魚の定着に直接関連してくるのかは、まだ確かではないが、急激な工業化・産業化による環境破壊もかなり目立っていた。調査地のひとつでは、住民の方の発言に「3年ほど前までは、もっと魚がいたが、最近はめっぽう減ってしまった。」という内容もあった。しかし、外来魚に関して見れば定着・増加が進行しているので、もしかすると工業化による環境破壊が外来魚の定着に寄与している可能性が

あるかもしれない。



写真2 汚染水の流出

また、今回のフィールドワークで初めてわかった事実がある。本研究の対象種は、食用として持ち込まれたアフリカ大陸原産のティラピア類2種、そして中南米原産のキクラソマ1種（写真1）である。キクラソマは、写真からもわかるように、美しく特徴的な模様をしており、観賞魚として持ち込まれた



写真3 キクラソマ *Cichlasoma urophthalmus*

魚である。最近、他の2種同様に自然水域に定着していることが確認された。今回、調査地のひとつの近くに大きなレストランがあり、そこで食事をとった際に、店員に対してインタビューを行った。すると、なんとキクラソマを食べているということがわかった。まだ、メニューには載せていないようであったが、味も美味しいと言っており、今後、ますます一般的に出回る可能性が示唆された。

今後の展開・反省点

本研究の対象が魚類であり、水圏生態系に焦点を当てる以上、全ての季節を網羅する必要がある。タイは明瞭に雨季と乾季が別れる地域であり、水圏環境もそれに伴い大きく変化する。よって、今後は、今回の渡航が雨季であったので乾季における調査を行う。また、外来魚の影響をより明瞭に把握するために、外来魚が生息しておらず、在来生態系がまだ残されている比較対象区となるような環境を見つける事にも取り組む予定である。論文調査の結果、候補地が数カ所見つかったので、次回の調査の際に確認を行う。さらに、今後は地元住民による外来魚の利用などを把握するためにアンケート調査やインタビュー調査を行う予定である。

反省点であるが、今回の渡航では、採集や解析等に時間をとられて、なかなか実践的な語学学習を行うことができなかった。よって、次回からは、計画的に語学学習の時間を設けて、語学力の向上にも積極的に取り組みたい。